

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会

〒753 山口市大手町 2-18

山口県教育会館内 TEL 0839 (2) 1218



会報

松 門



感動教育に思う

山口女子大教授 河村 太市

山裾に暮らしていると、鶯の声が間近に聞かれる。その声も、いまはもう馴れっこになってしまったが、十数年前ここに居を構えた当座は、しみじみと鳴き声に聞き入ったものである。

過日同年輩の者とお茶を飲んでいたとき、某氏が最近感動することがなくなったという。ある者は、それは年齢のせいだといひ、別の者は世の中全体が豊かさの中にとっぷりつかっているためだろうと応じていた。

感動することは人間の特質である。私たちは自然の営みに、文化遺産に、あるいは先人の生きざまに感動する。それだけではない。日常生活の中のものとした他人の行為にも、あるいは昔愛用していた万年筆を引き出しの底に発見したときにも感動する私たちである。だが一方で感動することが少なくなったことも実感されるところである。近年学校教育にみられる感動

教育の重視は、極めて積極的な意義を有するものである。各地で素晴らしい実践が展開されており、また感動教材の研究が蓄積されつつある。

こうした動きをみていて思われるのは、佐藤一斎の「我れ自ら感じて、しかる後人これに感ず」（言志叢録）、という言葉である。まず自分自身が感動することによって、はじめて他人を感動させることが出来るものだというのである。感動教育にとって、「感動を伝える」

ことは大きな要素であるが、子どもたちの感動をよぶためにはまず教師自身がそのことに深い感動を覚えているのでなければならぬのである。

吉田松陰が弟子に書を授けているときの様子を、天野御民が次のように伝えている（松下村塾零話）。

先生門人に書を授くるに当り、忠臣孝子身を殺し節に殉

ずる等の事に至るときは、満眼涙を含み、声を顫はし、甚しきは熱涙点々書に滴るに至る。是れ

を以て門人も亦自ら感動して流涕するに至る。又逆臣君を窘めますが如きに至れば、目眦（めき）裂け声大にして、怒髪逆立するものの如し、弟子亦自ら之れを惡むの情を發す。

右の言葉に注釈は不要である。一斎の言を実証する好個の例である。

さて感動は心のことである。感動を伝えるとは心が心に通うことであつて、それは技術が伝えるのではない。感動教育にとって、このところが最も大切なところである。とかく教育の成否は教師の問題に集約されることが多いが、感動教育の場合とはくに教師の側に鍵があるといつてよいであろう。

なお、感動教材を媒介にした授業も、実はその日常的基盤としての学級の雰囲気（きふう）が左右するものであることは申すまでもない。学級の雰囲気は、ただに感動教育のみならず、学校におけ

る全ての教育活動、学習活動の基盤をなすものであり、先生たちが学級づくりに渾身の努力をばらわっている所以である。

ここで若干付言させてもらおう。近時、学級づくり、あるいは学校づくりに関連して、「校則」、「学校のきまり」といったことが論議をよんでいる。ある論者は集団生活にとって規則は不可欠だと述べ、他の論者は管理の強化であつて学習の自由を阻害し人格にかかわる問題だと述べる。それぞれに論拠をもった主張ではあるが、両者に共に望まれるのは、松下村塾が、「礼法を寛略にし、規則を擺落（はいたく）」（「諸生に示す」戊午幽室文稿）することの可能なしえたのはなぜであるか、このことを具に検討してみたいことである。礼法規則を寛略擺落したので、「諸生みなこの道に率（し）いて以て相交わり、疾病艱難には相扶持し、力役事故には相労役すること、手足の如く然り、骨肉の如く然り」（同前）、という状況が生まれたと短絡してはならないし、また松陰は決して礼法規則の否定者ではなかったことを踏まえて検討することが必要であらう。



山口鴻峰松陰讀書会のあゆみ

会長 原 祥文

研究集録

「涵育薫陶」は私どもの会の研究集録につけた書題であります。この研究集録は昨年度で第七集を発行しました。内容はそれぞれの会員が、松陰についてその時に感じたこと、研究したことなどを集めて小冊子にしたものです。

この研究集録は松風会に毎年五冊ずつ提出いたし、県立図書館にも二冊寄贈しております。

最初は後述のように会員が皆附属山口小に勤務していましたので、連絡もよくとれるし輪読会もよく開催できましたが、勤務地が方々に散ってしまつたので、年に一回の集録をまとめようということになったのです。

なお、この研究集録の第一集は、昭和五十八年三月に発行し、毎年一回三月にまとめてきました。平成元年三月は第七集となりました。書題の「涵育薫陶」は教育の原点であり、会員が共

に好きな言葉の一つであります。

輪読会

昭和五十年当時附属山口小学校に勤めていた者の多くが、その頃出版された「松陰全集」を購入いたしました。しかし、手に入れたけどまだ開いて見た事が無いという人が多く、私もその一人でした。萩で松陰輪読の経験を持つ、見好豊先生の発案で、同年四月八日私の家に、見好先生、梅本先生、阿野先生の三人に集まってもらい、輪読を始めたのがこの会の発足です。

松陰全集第三巻（講孟餘話）の最初のページから輪読を始めましたが、はじめのうちは、もっぱら見好先生の講話のようないででした。

ました。

輪読は当番を決め、その人が先ず全文を朗読し、意味を説明し、それについての意見を述べあうというやり方で進めました。が、時にはそれから発展して、現実の教育についての議論になることもありました。お互いに自由な立場で意見を述べ、夜が更けることも度々でした。



輪読をする会員

夏期研修会

輪読会の話題の中で、松陰ゆかりの地を訪ねて見ようという発案がなされました。それを夏期に行うことが決定され、昭和五十二年夏に第一回目を実施いたしました。以下そのあしあ

とを記してみますと次のようになります。

第一回 昭和五十二年夏

須佐方面

第二回 昭和五十三年夏

柳井方面

指導者 谷林 博先生

第三回 昭和五十四年夏

下関方面

指導者 藤田 武男先生

第四回 昭和五十五年夏

玖北・岩国方面

第五回 昭和五十六年夏

長門方面

指導者 平川 喜敬先生

第六回 昭和五十七年夏

周防大島方面

指導者 福本 幸夫先生

第七回 昭和五十八年夏

萩方面

指導者 末永 明先生

第八回 昭和六十一年夏

岩国柱島方面

第九回 昭和六十二年夏

下関彦島方面

指導者 澤 忠宏先生

第十回 昭和六十三年夏

向津具半島

以上がこれまでの夏期研修会の概略ですが、そのいくつかを詳しく紹介したいと思います。

第五回の長門方面は平川喜敬

先生を講師にお願いし、村田清風先生と吉田松陰先生について学びました。写真は平川先生のお宅の前で記念に撮ったものです。



村田清風先生の記念館等を見学解説をしていただき、村田清風先生のこと少し明らかになったような気がいたしました。先生にいただいた「人間村田清風に学ぶ」のパンフレットの書き出しの部分を紹介しましょう。

「天保の大改革を指揮した村田清風は、防長きつての詩藻豊かな行政家であった。遺された論文や記録類は多数にのぼるがそれは、幕藩体制がようやく揺



らぎかけようとする文化文政以後の、特にわが防長の政治経済情勢を知る上に、欠くことのできない資料の一つといえるであろう。その上、それら書簡や記録類の間を埋めて夜空に輝く星くずのようにきらめく詩歌にいたっては、味わい尽くせない多くの作品が遺されているのを知ることが出来る。」

次は第七回萩方面の視察で末永先生から、松下村塾や松陰先生生誕地等で、実地に御指導をいただきながら学ぶことができました。

写真は松下村塾の前で撮ったものです。

末永先生は我々のために、資料を作られ見学の順序を考えて案内して下さいました。よく知っているつもりであったのですが、先生の解説により、さらに深く松陰思想の背景を知ることができたような気がしました。

最後に第九回下関彦島方面の視察について、書いてみたいと思います。

千五百万年前の断層が続く海岸で、貝化石、桂化木、奇岩が豊富に見られる、考古学、地層学の宝庫である。

幸いにも干潮時で、全員が海岸に降り立つことができ、海からの景観の素晴らしさを満喫することができた。次の写真はその時のものである。



当時彦島の西山小学校の校長であった見好先生が企画して実施したものです。その報告書（研究集録第六集）により、その一部を紹介したいと思います。

昭和六十二年八月十九日、午後二時、県下各地より西山小学校へ集合した山口鴻峰松陰読書会の面々と一緒に、松陰・廻浦紀略の道を訪ねる夏期研修を実施した。講師は日本海事史学会会員であり、彦島のことについては隅から隅まで踏査され、調べ尽くされている、澤忠宏（彦島江浦町在住）先生にお願いした。

1 獅子ケ口砲台跡

当日は残暑厳しく、うだるような暑さの中、先ず西山の獅子ケ口砲台跡を訪ねることにした。ここは約二千万年前から二

2 福浦の金比羅宮

次に訪ねたのは、福浦の金比羅宮である。これは、文政十二年（一八二九）に建立されたもので、北前船の船頭たちが航海の無事を祈願するために参詣し大変な賑わいをみせたお宮である。また、この金比羅宮の石段は約五十度の急勾配で二百七十

九段あり、我々はあまりにも急なため、上りは女優木暮実千代さんの生家そばの小道を通って登ることにした。

ここで、廻浦紀略を読んでみよう。

仲六 小舟を発して福浦に至る。伊崎より二里余、金比羅祠に登り、燈籠堂の台場を検す。台場未だ築かず、余好事にして燈堂に登り、且つ其の燈篋を見、油銭の出づる所を問ふに、嚮導云はく「船頭の多く繫泊したる時乞ひて出さしむ」と、祠傍に文政十年に作る所の長府の儒員小田圭の碑文あり。祠に登るの石階未だ悉く成らず。既に成れる所を見るに新旧あり、漸を以って続成するものに似たり。因って之を問ふに其の銭を出すこと、猶ほ燈油の如しと云ふ。石階百六十余段あり、成就せば二百階許りなるべし。因って之を算するに、一級高さ七寸とすれば、直立十八丈の高さなるべし。

文中に「成就すれば二百段なるべし」と言っていた石段も、現在は二百七十九段で、松陰の予想をはるかに上まわるもので

あった。

3 松陰が止宿した宿屋跡

時刻も五時近くなり、暑さもようやくやわらいで来た頃われわれは関彦橋を渡り、伊崎町にあった関屋松兵衛の宿跡を訪ねることにした。この関屋には松陰は嘉永二年七月十五日から二十日の五日間止宿している。ここで、再び廻浦紀略を読んでみよう。

仲五……（略）……伊崎、戸数もと三百軒ありしが、長府領と網代の論争起りしより活計に苦しみ、戸口やや減じて、今は二百五十軒位なり町の長さ、前町・中町・北町にて十町許りなり。関屋松兵衛が宿に上り浴して後町筋を通り会所に至り……（略）……

以上が本会のあゆみの概略を記したのですが、写真に写っている会員の中山先生、講師の平川喜敬先生は故人になられました。謹しんで冥福をお祈りいたします。

継続は力なりと申しますが、研究集録も夏期研修も、続けていきたいと思っております。



松下村塾が問いかけるもの

—咸宜園との比較において—

下関市教育委員会 学校教育課長

見好 豊

塾風のちがい

下関市が九州に近い関係もあって、日田咸宜園を訪れる機会が多い。この咸宜園は広瀬淡窓が開いた漢学塾であり、幕末を代表する有名私塾の一つである。作家 邦光史郎氏は「歴史への招待」(NHK出版 第二十五集)において、この咸宜園と松下村塾との違いについて述べている。

全国各地から、常時二百人程度の塾生を抱えていたというこの咸宜園からは、地方の学者は輩出したものの、幕末維新の動乱の中で活躍する人材はほとんど育っていない。そして、ひとり長州萩の小さな私塾「松下村塾」のみが、その時代を動かす人材を数多く育てているのはなぜか。

これは、両塾の塾風というか教育の違い——塾の独自性——によると言うのである。

そこで、松下村塾と咸宜園と

いう二つの私塾(咸宜園が松下村塾より一時期ほど早く栄えた私塾ではあるが)を対比させながら、私なりに、改めて「松下村塾」の教育を問い直し、現代に継承すべきものは何かをさぐってみたい。とくに、松下村塾のもつ驚異的な教育効果、教育力の源泉はどこにあったのか、次の五点から考察してみたい。

はげしさとおだやかさ

両塾の違いの第一は、師弟関係の迫力(気魄)の差、緊張度の差である。

松下村塾の主宰者松陰は幽囚の身であり、しかも、彼は国事犯・政治犯である。

また、松下村塾は単に教育の場だけでなく、一種の政治結社の性格をもった場でもある。塾生として入門するにしても並々ならぬ覚悟と緊張感が伴う。

この緊張感が松陰と塾生の間を結びつけ、燃え上がらせていったと考える。松陰は全身全霊、真心を吐露して、はげしく問答

する。だから、塾生もいい加減な気持ちで講義を受ける訳にはいかないのである。両者の関係はまさに真剣勝負の連続であり火花を散らせる人間同士のぶつかり合いの場であったのである。

この点については、天野御民が塾で講義する師、松陰の姿を次のように紹介していることからも十分伺うことができる。

先生、門人に書を書くに当たり、忠臣孝子身を殺し、節に殉ずる等の事に至るときは、満眼涙を含み声をふるわし、甚しきは熱涙点々書に滴るに至る。是れを以て門人も亦自ら感動して流涕するに至る。又、逆臣君を苦しますが如きに至れば、目眦裂け、声大にして、怒髪逆立するものの如し。弟子亦自ら之を悪むの情を発す。

咸宜園における淡窓は、自然を愛し、自然にふれた心の波動をすぐれた漢詩にうたうことをたしなみとして奨励した。それ故に、咸宜園には平和で穏やかな塾風が流れていたのに対し、松下村塾は明日にも希望の実現を果たさずにはおかぬ若者の

のはげしさ、気魄に満ち満ちて

いたと考えられる。

「実学」の重視

第二点はカリキュラム・学習内容の違いである。咸宜園は漢学を主とした体系的、系統的なものであるが、松下村塾は兵学・経済学・歴史学・地理学といった実学をもとに、しかも体系がなく、個別的であり、臨機応変な内容が取り上げられた。時と場と人によって、ある時は兵学であり、ある人には歴史でありある場では地理学というように「時に急にして身に切なるもの」を講究したため、取り上げられる教材の選択が自由になされた。また、「野山獄読書記」にも示されているように、松陰の読みたい本が素読のテキストになることも多かった。

個性の開花

第三点として塾生の個性を大切にすることである。この点については、「学ぶ者咸宜し」という咸宜園と「来たる者は拒まず、往く者は追わず」という松下村塾の方針からして、実によく共通している。

この方針は当時の「三奪の法」と言われるものの中にも、よく示されている。入門してくる者に対して、あらかじめ三つのこ

とを奪う——年齢を奪う・學歷を奪う・門地を奪う——という意味である。

淡窓は「いろは歌」で「鋭きも鈍きも共に捨てがたし、雖と槌とに使い分けなば」と歌っているように門弟一人一人がもっている資質を大切に育てようと努力を傾けているが、松陰も一人一人の個性を見抜く点については天才的な素質があった。

とくに淡窓の場合、塾生も多く、いちいち一人一人に当たって指導するということは、いくら努力しても、そこには自ら限界があった。これに対し、松陰は塾生の人数も少なく、面授面の指導を常としていたから、塾生の考え、行動をはじめ、すべての行動・表情・気持ちといったものが手にとるように分かる、一人一人の個性を的確にかむことが可能であった。

その上、松陰はあのように純粹で、至誠の人であったから、塾生を心から信頼し、「お前ならできる、やれる力を持っている」というように相手への思い入れをすることが得意であった。松陰はこの思い入れを数多くの手紙とともに「送序」「名字説」「贈言」などの文章で塾生に与

え、励ましたのである。この思い入れが結果的に、塾生の個性を開花させることにつながったと思われる。

いずれにしても、個性を生かすには多数数の予備校的、マスプロの塾ではどうしても無理であり、やはり、ゼミナル形式の少数数の塾でなければ実現できないのではなからうか。その点、松下村塾は規格がピッタリ合っていたとも言える。

面授面受

第四点は塾生との直接指導であるか間接指導であるかという違いである。咸宜園の場合は窓を頭にして教授陣の陣容というものががちり組まれ、組織的に動いている、いわゆる集団指導体制である。それに対して松下村塾の場合は松陰一人である。勿論、久保清太郎、小田村伊之助、富永有隣、久坂玄瑞などは松陰を補佐して塾生の指導に当たってはいるが、松陰の存在に比べればもの数ではない。しかも、多くの場合は一対一の面授面受の形態（マンツーマンの教育）をとっていて、師の全人格が肌伝わってくる間隔での教授である。

志を核とした人間学

第五点として、人間学と知識の違いを上げることができよう。

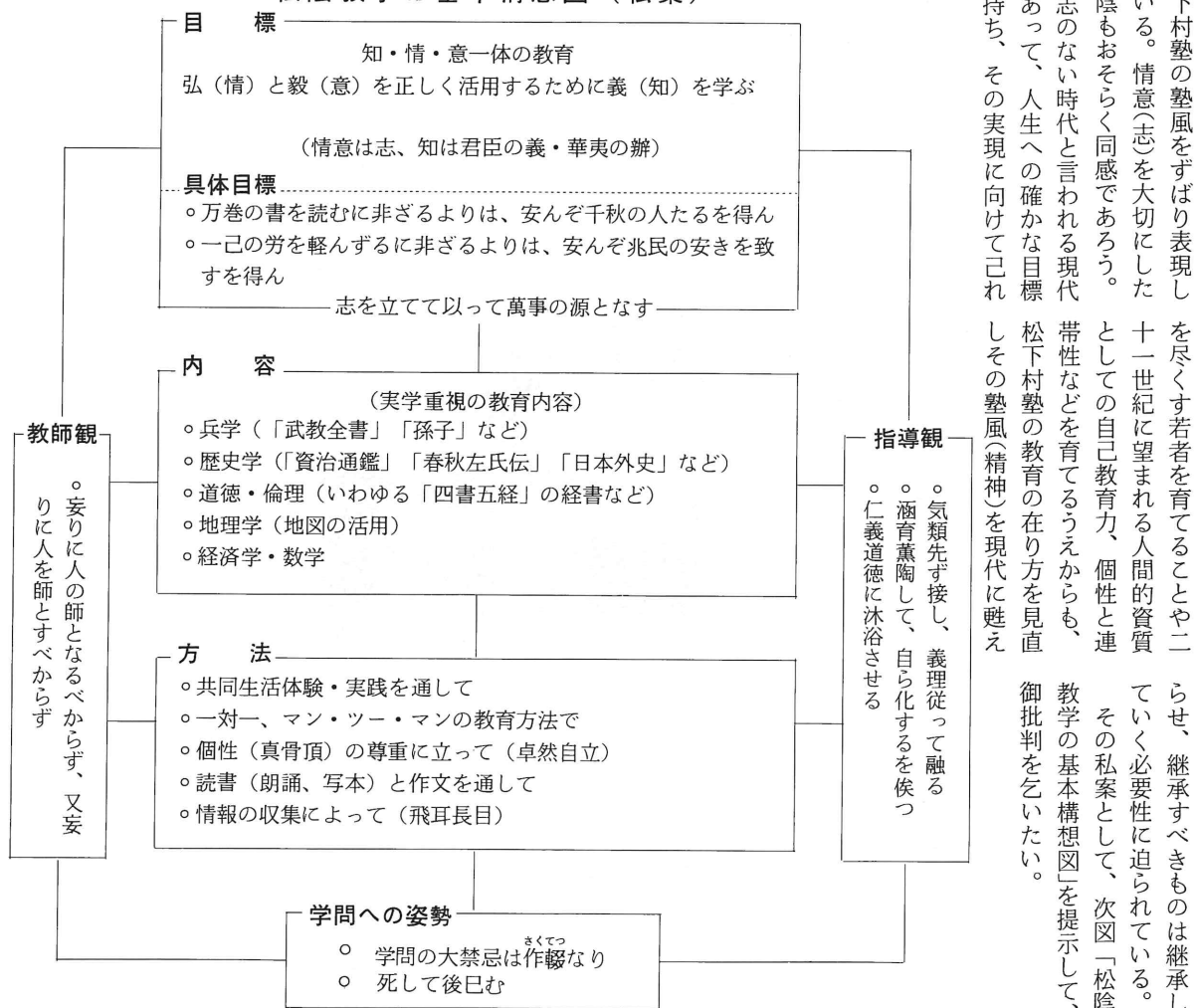
咸宜園の教育は徹底した実力主義であり、年齢・家柄・学歴を問わず成績順位ですべてが決められていたし、月九回のテストが行われ、順次昇級していくシステムがとられていた。そして、ここで全課程を修めた優等生は諸藩校の教師に召しかえらる者も少なくなく、いわば官吏登用の一つのステップ、資格取りであったとも言える。

これに対して、松陰の教育は彼がいつも塾生たちに「学問というものは、人の人たる所以（ゆゑん）を学ぶものであって、学者になるためのものではない。また、知識の切り売りでもない。実行することが肝心である」と言っているように、知・情・意の調和のとれた人格教育を目指した。特に、松陰が大切にしたのは情であり意である。これを松陰は志（至誠）として最も大切にした。

魁れ、松下村塾

フランスの詩人、アラゴンは「教えるとは共に希望を語ること、学ぶとは心に誠を刻むこと」（詩集「フランスの起床ラッパ」より）と歌っているが、まさに、

松陰教学の基本構想図（私案）



「義卿三十、四時已に備はる、亦秀で亦実る、其秕たる」と其の粟たると吾が知る所に非ず。若し同志の士其の微衷を憐み継紹の人あらば、乃ち後來の種子未だ絶えず、自ら禾稼の有年に恥ざるなり。同志其れ是れを所思せよ。」

この文章は、安政六年（一八五九）十月二十六日、吉田松陰が処刑される前夜に書き残した畢生の遺書「留魂録」の一節である。まさに教育者松陰の、門下生に対する最後の痛切なる呼びかけであった。

この訴えに、長州の若者たちは見事に応えた。その穀物を実らせ、またさらなる後世への種子となった一人が、他ならぬ高杉晋作であった。

高杉晋作は、天保十年（一八三九）八月二十日、長州藩毛利三十六万九千石の城下町萩の菊屋横丁に、二百石取り大組士高杉小忠太の嫡男として生まれた。

晋作が生まれた天保十年といえは、天保八年の大塩平八郎の乱に続いて、この年の五月には渡辺華山、高野長英らが捕えられた「蛮社の獄事件」があり、二年後の天保十二年には、老中水野忠邦による天保の改革が行

われるなど、三百年の太平をむさぼってきた幕府体制崩壊の前夜ともいふべき年であった。

そうした世情をよそに、晋作は平凡な幼少時代を過ごし、十四歳から藩校明倫館に学ぶ。学問よりもむしろ剣術の修業に熱心な少年であったが、やがて朱子学を基本とする明倫館の旧態依然たる教育にあきたらず、安政四年（一八五七）七月ごろから松下村塾の松陰のもとを訪れるようになる。

松陰をめぐる人びと(8)

—高杉晋作—



前下関図書館長 清永唯夫

松下村塾には、時を同じくして多くの俊英たちが集まるのであるが、晋作の入門は決して平坦なものではなかった。軽輩の子弟が集まり、不穏な気風の感じられる村塾に近づくことを嫌う、実直な藩の役人であった父・小忠太の保守的な意識が、晋

作の行動の大きい枷となつて、孝心厚い彼を苦しめる。当初は父の目をかくれて、夜ひそかに村塾を訪れるといった状態であった。

だが晋作は、次第に松陰に傾倒して行く。松陰が継いだ吉田家は、本来藩士に山鹿流兵学を教えるべき家職にあり、松陰もまたその奥儀を極めた人であったが、彼の学問の姿勢は、

「朱子学だ、陽明学だと偏っているは何の役に立つまい。とにかく尊王攘夷の四字を眼目として、だれの著書でも、だれの学説でもその長所を取って学ぶようにしたらよいのである」といったものであった。

それと同時に、「飛耳長目」と題した情報収集記録が残されているように、国内外の情報の学習の中で、極めて現実的な思索の交換もあった。松下村塾が他の儒学塾と根本的に異なる点はそこであり、村塾に学んだ若者たちは弾力性に富んだ思考を身につけていった。

そうしたなかで、洞察力に優れた晋作はたちまち頭角を現わし、松陰もまた「高杉の識をもつて、久坂の才を行えば」と、晋作の識見、洞察力を見抜き、

久坂とともに松門の双璧として高く評価した。

やがて晋作も萩の地から旅立つときを迎えた。安政五年（一八五八）七月二十日、文学修業のために江戸に向う。江戸では二か月ばかり大橋訥庵の塾に学



下関の日和山に建つ高杉晋作の像

ぶが、これに失望した晋作は、幕府の学問所昌平塾に入る。

この頃、萩にいた松陰が、尊攘運動における長州藩の立ちおくれを憂いて、老中間部詮勝の暗殺計画を立て、江戸の晋作らにも決起をうながす事態が起こる。狂ともいふべき無謀な計画であり、江戸の情勢を知る晋作は久坂らと計り、松陰に対し時を待つべきだという練止の手紙を送る。藩でも松陰の激発を心

配して再び野山獄に投じられるが、幕府もまた梅田雲浜らとの関係を問うため松陰を江戸に招致し、伝馬町の獄に下す。

この時晋作は、松陰の獄舎生活が少しでも居ごちがよいようにと、必死に金子を集めて牢名主にとどけまた書物の差入れなど、師のために真心こめて尽す。松陰に対する敬愛の念深く謝恩の心厚い青年であった。

しかし、二人の接触を恐れた藩では、晋作を引き離すため帰藩命令を出し、晋作は心を残しながら江戸を発つ。一か月後萩に帰った晋作は、松陰処刑の悲報を聞くのである。松陰の死が、晋作に深い影響を残したことはいうまでもない。

翌万延元年（一八六〇）一月二十三日、二十二歳で山口町奉行井上平右衛門の二女マサ（のち雅子）と結婚するが、閏三月七日には海軍蒸気科修業のため藩の軍艦内辰丸で江戸へ向う。そして八月、江戸への東北遊歴の旅に出る。自らは、各地の剣客と立ちあい武術の腕をみがくための試撃行という。その遊歴中、水戸学の完成者会沢正志斎（安）を水戸に訪ね、会沢門下で憂国の士加藤有隣を

簡間に、兵学・蘭学に通じ開国をとなえる佐久間象山を松代に開国と富国強兵を説く横井小楠を福井に歴訪、当代一流の学識者に会って大いに識見を広める。それらの学者は、松陰もかつて歴訪した人々であった。

その後萩に帰り、藩の世子毛利定広の小姓役として初めて出仕した晋作であったが、文久二年（一八六二）に入って上海行きを命じられる。幕府が清国に使節を派遣するに当って各藩に随行員をつのり、藩から推選されての上海行きであった。晋作ら五十一名の一行は、長崎に百日近く滞留したのち上海に渡り、五月六日から七月六日までの二か月間、上海に滞在する。

当時、清国は大平天国の乱の最中にあり、阿片戦争後の疲憊ぶりとイギリスを中心とした植民地政策の実情を目にして、これが決して対岸の火でないことを痛感、晋作は「我邦も遂に此の如くならざるか」と記し、真に国士として開眼していく。

上海から帰って以後の晋作の行動は、志士として次第に激烈なものとなって行く。実現しなかったものの長崎でのオランダ船購入の独断契約、常陸国笠間

の加藤有隣を訪ねるための亡命血盟しての異人殺害計画、品川御殿山の英国公使館焼打ち決行明けて文久三年（一八六三）に入ると、師松陰の遺骨を小塚原刑場から白昼堂々と改葬するなど、まさに行動する晋作であった。そして、晋作が主張する、防長を一天地として割拠し、後日の討幕に備えよという「割拠



高杉晋作回天義挙の碑
(長府の功山寺総山前)

論」が時期尚早として藩に入れられぬとなると、十年間の暇を請い、「西へ行く人を慕うて東行く我が心をば神や知るらん」と鬚を断ち東行と称して萩郊外の松本村に隠棲する。

この年五月、長州藩は下関の海峡において五次にわたる攘夷戦を展開、西洋の近代兵器の前

にもろくも敗北をきつする。六月四日、藩主毛利敬親は晋作を召し出し、馬関（下関）台場の立て直しを命ずる。そして晋作は六月六日に下関に登場。豪商志士白石正一郎宅において六月八日に、封建制の枠を超えた新しい戦力「奇兵隊」を創設、以後、下関を中心舞台として晋作の活躍が始まるのである。

奇兵隊は、武士、町人、百姓を問わず、進んで国事に身を投じようとする者は総べて入隊が許され、長州藩諸隊結成の嚆矢ともなり、討幕回天の原動力となった。それはまた、松陰の到達した思想「草莽崛起」にも連なるものであった。

八月十六日に起こった藩正親兵先峰隊と奇兵隊の不幸な衝突「教法寺事件」によって、晋作は三か月にして奇兵隊総督の地位を去るが、芸州吉田、洞春公毛利元就以來の「譜代の臣」ということは、晋作が終生自負するところであった。

奇兵隊創設を晋作のまず一つの功績とするならば、元治元年（一八六四）八月の、英米仏蘭四国連合艦隊襲来における講和使節としての見事な外交手腕、

同年十二月十五日の功山寺決起と内訌戦の勝利による藩論の統一、そして慶応二年（一八六六）における四境戦争（第二次長州征伐）小倉口の戦いでの海軍総督としての指揮もまた彼の偉大な功績ということが出来る。

その間、京都進発派の説得失敗による脱藩、野村望東尼の平尾山荘への潜居、愛人おうのを伴っての四国への逃避と、ときに「不在の人」となったが、藩がまさに危機を迎えた局面には必ず登場し、これを救い、長州藩をして維新回天の功藩たらしめた晋作こそ、幕末動乱期の申し子であつたろう。

晋作は、しばしば身の危険を迴避した。しかし、今こそ死をかけて立つべきとみるや、「一里進めば一里の忠、二里進めば二里の義」と、決然功山寺に挙兵、また幕府征長軍との激戦に命を燃焼し尽す。これもまた、「拙劣な死」をさけ、真に「不朽の死」を見い出せという師松陰の死生観に沿うものであった。

そして晋作は、慶応三年（一八六七）四月十四日、下関の地に満二十七年と八か月の命を閉じる。大政奉還のわずか六か月前であつた。

事務局通信

本年度主要事業計画

本年は松陰先生殉難百三十年に当たるので記念行事としての次の計画をたてています。

・会報「松門」第九・十号発行配布

・吉田松陰輪読会 八月四日

・青年教師松陰研修会 八月十七・十八日 萩青年の家

・山口県学校吟剣詩舞道大会 八月二十日 山口県教育会館

・松陰の道、萩往還歩行大会 十月二十二日

・第五回校長松陰教学研究会 十二月初旬

・松陰教学シリーズⅢ「吉田松陰の甦る道（下）」発行・配布

販売 一部五百円

・松陰研究に対する助成・講師派遣等

研究会等で吉田松陰先生に関する講演のご希望がある場合は無料で講師を派遣いたしますのでお申し込みください。

（去る七月一日新南陽市で実施いたしました。）

・展示室・事務室の貸与・図書等の貸出しもいたしておりますのでお申し出ください。

資料展示室

- 豊 マツノ書店 平1
- その他 (つづき)
- 武廣 遜遺稿 武廣武雄 ビッグフォール出版 昭52
- 李卓吾 満口雄三 集英社 昭60
- 我が国の文教施策 文部省

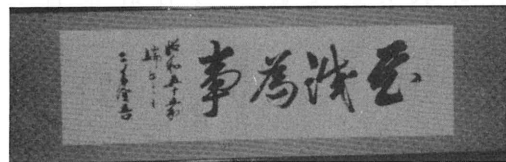
- 吉田松陰先生関係図書 (つづき)
- 松陰先生交友録 福本椿水 惜春山荘 昭3
- 松陰読本 三木・高倉・谷川 監修 建設社 昭12
- 吉田松陰女誠訓 守 繁蔵 雄生閣 昭13



日本画家 故松林桂月先生 揮毫の扁額



元内閣総理大臣 故岸信介先生 揮毫の扁額



議長 院教育 議員 議長 参事 山口 山松 元前

故二木謙吾先生 揮毫の扁額

- 大蔵省印刷局 昭63
- 萩藩閣録別巻 山口県文書館 平1
- 山口県社寺名勝図録 (復刻版) 清水吉康 マツノ書店 平1
- 防長史料文献解題 (復刻版) 山口県史編纂所 マツノ書店 平1
- 観風文庫
- 松風会副理事長であった故熊野隆治先生から松風寮時代に寄贈いただいたものであるが紹介しておく。(昭和十年〜十三年にかけて春陽社からの出版である)
- 先哲叢談 大日本文庫儒教篇
- 陽明学派 上・中・下巻 同右
- 二宮学派・折衷学派 同右
- 垂迦神道 上・下巻 大日本文庫神道篇
- 吉川神道 同右
- 復古神道 上・下巻 同右
- 日本書記 大日本文庫国史篇
- 続日本紀 上巻 同右
- 大日本史 一 同 国史篇
- 日本外史 上・下巻 同右
- 神皇正統記・愚管抄 同右
- 大鏡増鏡 同右
- 大日本史賛戴・保建大記・中興鑑言 大日本文庫国体篇
- 風土記集 大日本文庫地誌篇
- 日蓮上人集 大日本文庫 佛教篇
- 本朝高僧伝 上・下巻 同右
- 法然上人集 同右
- 白隠禅師集 同右
- 弘法大師集 同右
- 聖徳太子集 同右
- 萬葉集 上・下巻 大日本文庫 文学篇
- 平家物語 同右
- 榮花物語 上・下巻 同右
- 随筆文学集 同右
- 今昔物語集 上・中巻 同右
- 南総里見八犬伝 一・二・三 同右
- 謡曲選 同右
- 近松浄瑠璃傑作集 上・下巻 同右
- 狂言選 同右
- 物語文学集 同右
- 水戸学派其他 大日本文庫
- 勤王篇
- 勤王志士遺文集 一・二・三 同右
- 武士道集 上巻 大日本文庫
- 武士道篇
- 畫道集 大日本文庫芸道篇
- 頼山陽 徳富猪一郎著
- 実語教 (以下和綴の本)
- 箋註 十八史略 校本一・七
- 増補 日本政記 一・八
- 孟子 一・四
- 論語 三・六・八
- 大学章句 序
- 古文経 序
- 庭訓往来精注鈔全
- 中庸

(編集後記)

・河村教授の「感動教育に思う」では、心が心に通うことが大切であり、学校のきまりについても松下村塾のあり方を参考にすべきであると述べておられる。

・「松陰をめぐる人びと」は、本年は高杉晋作生誕百五十年に当たりあちこちで展覧会も盛大に行われている高杉晋作を取り上げ、おもしろい中を二ページにわたって清永先生によくまとめていただいた。

・「研究団体のあゆみ」は、山口を紹介していただいた。永年のご研究に頭が下がる。集会が困難となったため、研究誌と夏季研修会に力を入れておられる。

・見好先生には、「松下村塾が問いかけるもの」として、咸宜園との比較において執筆いただいた。松陰先生殉難後に先生の至誠が塾生の精神をゆり動かし維新の大業がなしとげられたのではないだろうか。(谷口)

- 集註 纂評謝選拾遺 一・二
- 四・六・七
- 詩経集註 一・二・三
- 刪修近古史談 二・四